マメ先生が伝える
保育のエッセンス

〔68〕

主体性とは「私が私であること」

大豆生田　啓友・玉川大学教授

〈今回の言葉〉
「『主体性』というと、『望ましい積極性』の側面が強調されがちです。でも、泣き叫んで登園を拒否したことも、あるがままの主体的な表現です。『主体性』とは『自己の純粋な立場において行うさま』ともいえるでしょう。つまり『私が私である』ことなのです」

「主体性」という言葉が盛んに用いられるようになってきました。小学校以上も含め「主体的・対話的で深い学び」が大きな教育のテーマですから、当然のことでしょう。

その一方で「主体性とは何か」という問いも起こっています。問いが起こることは、とても大切です。よく、「自分自身の考えで行動すること」などと説明されることがあります。あるいは「積極性」と同義語のように用いられますが、そうなのでしょうか。「主体性」とは、必ずしも自明の概念ではなさそうです。

ある園の3歳児。サトル君は入園当初、登園をしぶります。園の入り口で大きな声で泣き、体全体で拒否して園に入ろうとしないのです。保育者はその気持ちを受け止め、玄関の所で毎日、抱っこしていました。

少しずつ話をするうちに、サトル君がテレビのヒーローが好きなことが分かりました。保育者はヒーローベルトを用意し、「このベルトに折り紙を貼ってみないか」と声を掛けると、「つくる」と言い出したのです。

ここから、サトル君はヒーローベルト作りを数カ月し続けました。ベルトの真ん中の丸い所に毎日、さまざまな紙を貼り付けていきます。そのため、ベルトにはすごく厚みが出て、その重さでずるずると下がります。それもうれしいようで、ベルトは園と家庭を行き交うのに不可欠なものとなったのです。そうする中でサトル君の安全基地が形成され、次第に園で楽しく遊び始めました。

そして、7月ごろになるとベルトは必要なくなり、それを外して他の子がしている別の遊びを夢中で始めたのです。

「主体性」というと、「望ましい積極性」の側面が強調されがちです。でも、泣き叫んで登園を拒否したことも、あるがままの主体的な表現です。「主体性」とは「自己の純粋な立場において行うさま」ともいえるでしょう。つまり「私が私である」ことなのです。

その「私」がしっかり受け止められる関係性があることで、より「私」らしく表現（主人公性を発揮する）されるようになっていくのだともいえます。この「なっていく」というところも、とても大切だと考えます。「主体性」とは単にその子の中にあるということではなく、関係性の中にあるともいえるのです。

それは、子どもの主体性を尊重しようとする大人の主体性との関係性でもあります。だから、私たちは赤ちゃんのうちから、その子のありのままの姿を主体性として尊重するところから保育を始めるのです。

次回は4月11日付掲載